中学校美術科の支援資源としての美術館の可能性

「倉敷デジタル美術散歩」の実践から

On Available Resources in Art Museums for Junior High School Art Eduction : A Report on the implementation of the Lesson focused on Digital Imaging in Kurashiki

森 弥生 (岡山大学教育学部附属中学校) 山口 健二 (岡山大学教育学部)

赤木 里香子 (岡山大学教育学部) 二宮 典子 (岡山市デジタルミュージアム準備室)

Mori, Yayoi Akagi, Rikako Yamaguchi, Kenji Ninomiya, Noriko

研究の背景

学校教育と社会教育の連携・融合は、いまや学校とミュージアム (美術館・博物館)の双方にとって重要な政策目標となっている。先進的なミュージアムではアウトリーチ活動が積極化され、学校教育にとっても、「総合的な学習」の導入を契機に外部教育育の有効活用(アウトソーシング)の要求は高まっている。そうした背景から学校教育の一環としての鑑賞学習は年々盛んになってきたが、それが一過性の経験に終わりがちなこともしばしば指摘されている。ミュージアムへのより主体的な、かつ生涯をつうじた関与を可能にする方策が求められつつあると言えよう。本研究は、中学校美術科における学習をケーススタディとして、この課題に取り組むものである。

「倉敷デジタル美術散歩」授業計画の概要

岡山大学教育学部附属中学校では、平成9年度から美術科のカリキュラムに美術館での鑑賞学習を位置付け、美術館スタッフと共同で鑑賞指導を研究してきた。本年度はさらに研究を進め、岡山大学教育学部教官と岡山市デジタルミュージアム準備室スタッフを加え、美術館における鑑賞活動を核にデジタル機器を活用した表現活動へ発展させる授業を構想した。

具体的には、第2学年5クラス(203名)を対象に、 倉敷市の大原美術館への校外学習(半日)と、事前授業(1時間)・事後授業(3時間)を実施した。校外学習での経験をデジタルカメラ撮影による映像スケッチとして記録させ、美術館を活用した鑑賞学習の効果を検証した。事後授業では、生徒に対象の見方・見え方の変容を意識させ、Power Point によるプレゼンテーションを作成させた。

学習目標は、 郷土の優れた美術館を鑑賞して、さまざまな時代や地域の美術作品のよさを味わうこと。 美術作品とそれを所蔵する美術館の価値に気づき、優れた美術作品・美術館で学習することによって沸き起こる楽しさや喜び、感動などをデジタル映像に表現すること。 デジタル映像を編集して「私の美術散歩」(仮称)としてまとめ、他者に発信すること。以上の3項目である。

なお、大学と附属学校との連携推進の観点から組織された教育学部学生ボランティアが、校外学習の引率(延べ18名)と事前・事後授業のサポート(延べ30名)にあたった。

連携から生まれる可能性

大原美術館は極めて優れた地域資源であり教育普及活動にも実績を持つ。事前打ち合わせの結果、美術館スタッフによるレクチャーとギャラリートークを約2時間の鑑賞学習の前半に導入した。まずレクチャーで大原美術館の成り立ちに関する知識を得たうえで、特別展示「モネ 光の小部屋」においてビジュアル・アンド・シンキング形式のギャラリートークを行い、後半に自由鑑賞の時間を設けた。その後の生徒の撮影対象・方法の変化は、鑑賞経験をつうじた対象の見方・見え方への気づきをダイレクトに反映したものとなった。

鑑賞学習の効果が表現学習に波及することは、美術科教育研究においてはすでに知られている。しかし、学校教育の支援資源としてミュージアムをいかに活用しうるかという視座において、こうした知見はミュージアムが提供するプログラムの開発にひとつの指針を与えるはずである。ミュージアムは"見る対象"としてのみ存在するのではない。見る側からのミュージアムだけでなく、見せる側からのミュージアムを体験的に理解するためのプログラムを模索することが求められている。

本研究においては、生徒のプレゼンテーションを バーチャル・ギャラリーのコンテンツとして発展さ せるべく各機関と折衝中である。学校外に発表する ことによって学習成果の評価を他から受けたり、美 術館スタッフと再び交流の場を持ったりすることが 期待される。これらをつうじて、ミュージアムの収 蔵品を活用した教育にとどまらず、ミュージアムと いう組織が果たす教育的役割そのものへの理解を深 める教育につなげていきたい。

本研究は、岡山大学学長裁量による特別配分経 費(平成 14 年度) を受けて実施した。